

(2024年9月25日受稿 2024年10月30日受理)

【研究ノート】

「初期のふり遊び」場面における自閉スペクトラム症幼児と 母親との「コミュニケーションのずれ」の展開 ——「拒否」や「否定」の言動に着目して——

辻^{つじ} あゆみ (和光大学・非常勤講師)

E-mail: ayumifuhna@ybb.ne.jp

1. はじめに

これまでに自閉スペクトラム症児は、典型的なふり遊びが難しいと指摘されてきた。例えば、Baron-Cohen, Allen, & Gillberg (1992) は、自閉スペクトラム症児では、機能的な遊びや感覚遊びは見られるが、ふり遊びが乏しいか、通常とは異なる様態になると指摘した。また、Charman, Swettenham, Baron-Cohen, Cox, Baird, & Drew (1997) は、Mental Age (以下 MA と略す) 20 か月の自閉スペクトラム症児と知的障害児、Chronological Age (以下 CA と略す) 20 か月の定型発達児のふり遊びを比較し、自閉スペクトラム症児では、ふり遊びが難しいことを示した。その一方で、荒木 (2023) は、自閉スペクトラム症児もふり遊びや見立て遊びを楽しむなかで、想像力の欠如を回復し、豊かな想像力を養うようになる可能性を示唆している。これらを踏まえると、自閉スペクトラム症児は、ふり遊びをするのかしないのか、するのであれば、どのようにしてするようになるのかという問いが生まれる。

この点に関して、自閉スペクトラム症児の親子間の遊びのケースを分析した辻の一連の研究 (辻・別府, 2020; 辻, 2024) が参考になる。辻・別府 (2020) は、麻生 (1996, 1997) に倣って、自閉スペクトラム症児がふり遊びにおいて役割交代遊びをするようになる過程を分析している。その結果、自閉スペクトラム症児は、ある身ぶりによって現前している対象に明確な意味を付与するふり、例えば、実物大のバナナやミカンの写真に口を押し付けたり、空のコップから飲む真似をするなどの「動作的表象としてのふり」を基盤に、表象を立ち上げ、積み木が電車になったりパンになったりする「象徴的な行為としてのふり」をするようになること、および相手や人形に飲ませるなどをする「表象的レベルの役割交

代」をするようになった後に、自分を自分とは異なる他者に見立て、他者を演じる「役割交代遊び」(小川・高橋, 2012) をするようになるというプロセスを見出した。ただし、辻・別府 (2020) の研究では、「ふり」のレベルを厳密に分類できておらず、また、「ふり」が見られた際の子どもと母親との応答関係も詳細に分析できていなかった。

そこで、辻 (2024) は、先行研究 (Tomasello, 1999/2006; 荒木・井上・立田・前田・森, 2004; 井上, 2005; Thompson, & Goldstein, 2019; 荒木, 2023) を参考に、ふり遊びを「初期のふり遊び」、すなわち1歳半ごろから見られるもので、様々な物にある意図的なアフォーダンスを切り離し、別のアフォーダンスに入れ替えて遊ぶもの (Tomasello, 1999/2006, p.172), 「中期のふり遊び」、すなわち2歳後半から見られるもので、あるモノを別のモノに見立てる「代用のふり遊び」(荒木・井上・立田・前田・森, 2004), 「後期のふり遊び」、すなわち5, 6歳頃から見られるもので、そこには存在していないモノやヒトを想起し日常場面を再現するふり遊び (Thompson, & Goldstein, 2019) に分類した上で、自閉スペクトラム症児が「初期のふり遊び」をするようになる過程を親子間の応答関係との関連から検討した。その結果、「初期のふり遊び」をするようになる過程で、対象児と母親とが注意を共有し、応答関係を形成するようになること、自他関係が変容することを明らかにした。その一方で、対象児においては、母親と状況を共同想起したり、ふりの行為を柔軟に変えたりしていくことが困難であることを見出した。辻の一連の研究によって、困難を有しながらも、自閉スペクトラム症児も「初期のふり遊び」をするようになること、その成立過程では三項関係が成立すること、自他関係が変容することが示された。ただし、上記の研究は「初期のふり遊び」における意味の「共有」に焦点を当てたものであった。

一方、「初期のふり遊び」の成立・展開には、コミュニケーションの「ずれ」もまた重要な契機であると考えられる。実際、辻（2024）も、道具箱の蓋をお風呂に見立てたであろう対象児が「ハイル」と言って蓋の上に座り込むも、母親は「お風呂じゃない」と言ってやりとりが終結する「齟齬」が見られたことを報告している。このような「ずれ」や「齟齬」は、自他の違いを強調し、自分とは違う相手の意図に気づききっかけになると同時に、そのような気づきは自己と他者の意図の調整へつなげるきっかけにもなると思われる。さらに、そのような体験が「中期のふり遊び」や「後期のふり遊び」へと展開していく可能性も介在する。

そこで、本研究では、辻・別府（2020）、辻（2024）で分析した「初期のふり遊び」における「コミュニケーションのずれ」に着目し、自閉スペクトラム症児の「ふり遊び」の成立プロセスについての知見を蓄積していく。その際、本研究において「コミュニケーションのずれ」を示すものとして、「拒否」と「否定」の言動を取り上げる。なぜなら、「コミュニケーションのずれ」が自分の意図と他者の意図が異なる時に生じるのであれば、子どもは相手の意図を受け入れることが難しい場面で、「拒否」や「否定」の言動を通して自分の意図を表出するようになると思われるからである。実際、「初期のふり遊び」が見られるようになる1歳半～2歳頃には、自分の要求や意図を表出したり、相手からの要求を拒否したり、相手との間で自分の意図を調整したりする場面（藤野, 2014）や、他者の意図との違いを意識した対比的な表現、「チガウ」と言うようになる場面（近藤, 2011）が見られることが報告されている。

上記を踏まえ、本研究では、「初期のふり遊び」が展開する時期において「コミュニケーションのずれ」を示す言動が見られるのか、見られるとしたらどの程度見られるのか、またそれが時間的にどのように推移・展開するのかについて把握することを第一の目的とする。また、親子間のやりとりのエピソードを質的に分析することで、量的に把握された「否定」や「拒否」の言動が本当に「コミュニケーションのずれ」を反映しているものであって、またそれが自分と他者の意図の違いを認識・理解していることを反映しているものであるのかを確認することを第二の目的とする。

2. 方法

2-1. 対象児

200X年11月生まれの男児（S児）。1歳半健診にて要観察と言われ、その後2歳半の時に医療福祉センターにて、自閉スペクトラム症と診断された。

それを機にA市の児童発達支援センターの親子通園に通うようになり、その後2歳10か月から単独通園となった。

対象児の全体的な発達の様相を新版K式発達検査2001（嶋津, 1985）の発達年齢で示すと、3歳3か月時点では、姿勢・運動 Developmental Age（以下DAと略す。）2:4（Developmental Quotient, 以下DQと略す。72）、認知・適応 DA1:10（DQ56）、言語・社会 DA2:0（DQ62）、全領域 DA2:0（DQ62）であった。観察終了（4歳3か月）時点では、姿勢・運動 DA3:10（DQ92）、認知・適応 DA4:1（DQ98）、言語・社会 DA3:0（DQ72）、全領域 DA3:5（DQ82）であった。

2-2. 対象児を分析対象とした理由

通常、ふり遊びは1歳から2歳頃に盛んになる。発達年齢だけを見ると、新版K式発達検査の認知・適応のDAが1歳10か月、言語・社会のDAが2歳のS児にとって「初期のふり遊び」は容易なことで、自然に観察されると予測された。しかし、実際には、対象児はブロックや積み木を使って一人で遊んでいることが多く、母親と遊びを共有することは難しかった。そのため、筆者は母親に対してお皿やコップ、スプーン、食べ物の玩具などを介して一緒に遊ぶように提案した。その結果、親子のやりとり場面において「初期のふり遊び」が展開するようになった。こうした経緯を踏まえ、「初期のふり遊び」での発達の変化を検討するには妥当な事例と考えた。

2-3. 対象児と筆者との関係

観察当時、筆者は対象児が通う児童発達支援センターにて嘱託心理士として勤務し、発達相談などを行っていた。研究協力者を募るに当たって、児童発達支援センターの園長に研究の主旨を説明し、協力可能な養育者を選んでもらった。そのうえで、該当の養育者（主に母親）に研究への協力を依頼した。筆者は親子のやりとり場面を観察し、子どもへの関わり方の留意点を母親に伝えるなどして母親を支援した。本研究は、この支援過程での映像記録をもとにしている。

2-4. 分析資料

200Y（X+3）年6月より9か月間（S児3歳6か月から4歳3か月まで）、A市の児童発達支援センターにて、毎月1、2回20分程度の親子のやりとり場面を観察し録画した（全16回）。親子から2m程度離れたところにビデオカメラを設置し、その様子を撮影した。その後、その場面で筆者が気づいたことを記し、報告書として母親に手渡した。

本研究では、「コミュニケーションのずれ」が自

他の違いを認識し、自分とは違う相手の意図に気づくきっかけになること、そのような気づきが自己と他者の意図の調整へつながる契機になること、その体験が「中期のふり遊び」や「後期のふり遊び」へと展開していく可能性を鑑み、対象児が「初期のふり遊び」をするようになった“ままごと遊び”を分析対象とした。

本研究では、“ままごと遊び”の定義を「ままごとセットの道具を使用し、日常場面を再演していると筆者が判断した場面」とした。この定義に当てはまる活動は、全16回のやりとり場面で観察された。観察時間はおおよそ4時間51分であった。

使用する玩具を選定するに当たって、母親にS児の好きな食べ物を聞き取った。そのうえで、S児の好きな食べ物、コップや皿、スプーンなどの食具、まな板、包丁、鍋などの調理道具のミニチュアを2組ずつ揃えた。ただし、S児の好きな食べ物が広がったこともあり、使用する食べ物の玩具は必要に応じて変更した。

3. 倫理的配慮

観察を開始する前に養育者に対して研究の主旨、すなわち「自閉スペクトラム症児におけるイメージの共有過程」の研究であることを説明し、親子のやりとり場면을ビデオに録画すること、研究発表することへの承諾を書面で得た。本論文を執筆し発表することへの許可も養育者から得ている。

4. 分析手続き

手続き1. 時期区分

辻・別府（2020）と辻（2024）では、対象児が初期のふり遊びをするようになる過程を3つの段階に分けて検討している。すなわち、“ままごと遊び”場面のうち、三項関係が成立しないまま、対象児が母親の行動を模倣していた第1回から第3回を第I

期、三項関係が成立し、初期のふり遊びを共有するようになった第4回から第10回を第II期、「役割交替」を基盤に初期のふり遊びが相互に行き交い展開するようになった第11回から第16回を第III期とした。本研究では、この時期区分に基づき対象児の発話内容の推移を調べた。

手続き2. データ起こし

最初に、“ままごと遊び”場面での対象児と母親の行動と発話の記録を作成した。作成に当たって、ビデオ記録を見ながら、対象児と母親の一つの発話とそれに伴う行動を一つ一つ書き出した。ここでは、1回の発話とそれに伴う行動を一つの言動とした。ただし、ことばを発することもないまま、対象児、もしくは母親が何らかの行動を示すこともあった。この場合は行動のみを書き出し、それも一つとした。

母親、もしくは対象児の先発する言動のうち、発話を伴うものを「働きかけ」とし、それに続く相手の言動を「応答」とした。そのうえで、一つの「働きかけ」に対する一つの「応答」を「応答関係」とした。（「働きかけ」と「応答」の具体的内容は辻（2024）のTable2を参照。）

「応答関係」は、対象児の発話による働きかけに対して母親が応答する場合としない場合の2パターン、母親の発話による働きかけに対して対象児が応答する場合としない場合の2パターン、合計4パターンに分けられた。このうち、対象児／母親の働きかけに対して相手が応答した場合を「応答成立」とし、相手が応答しなかった場合を「応答未成立」とした。

手続き3. 「コミュニケーションのずれ」の抽出

本研究では、「拒否」「否定」を意味する行動や発話として、「シナイ」「ヤラナイ」に含まれる「ナイ」という語、「イヤ」「ヤダ」という拒否を意味する語、「…デハナイ」「チガウ」「マチガエテル（ワスレテル）」といって事象を対比し否定する語に着目した。これ

Table1 「拒否」「否定」「不在」「不可能」の概要と具体例

カテゴリ	概要	例
拒否	子どもが母親の働きかけを拒否したもの	・Mが玩具のレンジを机に置くとSが「ヤラナイ」と言ってレンジを手で押す。
否定	子どもが母親の言動を否定したもの	・Mが「お寿司、並べて」というも、Sは「チガウ」とハンバーガーを取り出す。
不在	子どもが「ナイ」と不在を示したもの	・Sが「モウナイ」といってコップを差し出すと、Mも「もうない？」という。
不可能	子どもが母親の働きかけに対して「デキナイ」と応答したもの	・Mが容器を指差し「取って」というと、Sは容器に触れながら「（蓋が）トレナイ」という。

らの語を含む発話を Word の検索機能を使って抽出したところ、「ナイ」には「拒否」「否定」以外の意味内容を表す発話もあった。例えば、「ナイ」と言っている「ここにないこと」を母親に伝えるものや、母親の働きかけに対して「デキナイ」と応答するものである。このうち「ナイ」は、「(ここに) ナイ」ものについて言及していることから、「(ここに) ナイモノ」を共有するに当たって両者のあいだで「ずれ」が生じる可能性があるとして予測された。また、「デキナイ」には「ヤリタイケド、デキナイ」「デキナイケド、ヤリタイ」という対象児の思いがあり、それが母親に伝わらないことによる「齟齬」が生じる可能性があるとして予測された。そこで、これらも「コミュニケーションのずれ」に含める必要があると考えた。

これらを踏まえ、Word の検索機能を使って抽出された対象児の発話をその意味内容から分類したところ、「拒否」「否定」「不在」「不可能」に分けられた (Table1)。

ここでいう「拒否」とは、母親の働きかけを「イヤダ」「～シナイ」といって拒否するものである。「否定」とは、二つの事象を対比し「～デハナイ」「チガウ」「マチガエテル (ワスレテル)」などといって母親の発話を否定するものである。「不在」とは、「(ここには) ナイ」ことを表すものである。「不可能」とは、「～デキナイ」といって遂行不可能なことを表すものである。なお、「不在」には対象児から「ナイ」と言っている母親に働きかけるものも含まれる。

最初に、「拒否」「否定」「不在」「不可能」の言動を筆者が分類し、次いで、特別支援学校の教師1名 (以下「評定者」と略記) が評定した。評定に当たって、Table1 を示しながら、分類および評定の方法について評定者に口頭で説明した。そのうえで、先

述の手順に沿って、筆者が「拒否」「否定」「不在」「不可能」として分類したものを、前後のエピソードも含めて評定者に渡し、独立して評定するように依頼した。

評定者間の一致率は 91.5 % であった。評定が一致しない項目については、筆者と評定者で協議し再分類した。

5. 結果

5-1. 「コミュニケーションのずれ」に関する指標の量的推移

Figure1 に 1 回から 16 回にかけての、「拒否」「否定」「不在」「不可能」の推移を示した。全体として「拒否」が 39 個、「否定」が 31 個、「不可能」が 20 個、「不在」が 12 個であった。各期の推移をみると、第Ⅰ期は「拒否」が 10 個、次いで「不可能」が 1 個あった。この時期には「否定」と「不在」は観察されなかった。第Ⅱ期は「拒否」が 27 個、「不可能」が 19 個あった。第Ⅱ期に初出した「否定」は 8 個、「不在」は 7 個であった。第Ⅲ期は「否定」が 23 個、「不在」が 5 個、「拒否」が 2 個であった。第Ⅱ期に比べて「拒否」は減少したのに対して、「否定」が増加した。

総じて、第Ⅰ期と第Ⅱ期に多かった「拒否」は第Ⅲ期に減少した。第Ⅱ期に増えた「不可能」は第Ⅲ期に減少した。第Ⅱ期に初出した「否定」と「不在」のうち、「否定」は第Ⅲ期に増加した。

5-2. 「コミュニケーションのずれ」のエピソード

5-1 で量的に捉えた「拒否」「否定」「不在」「不可能」の言動について、真に「コミュニケーション

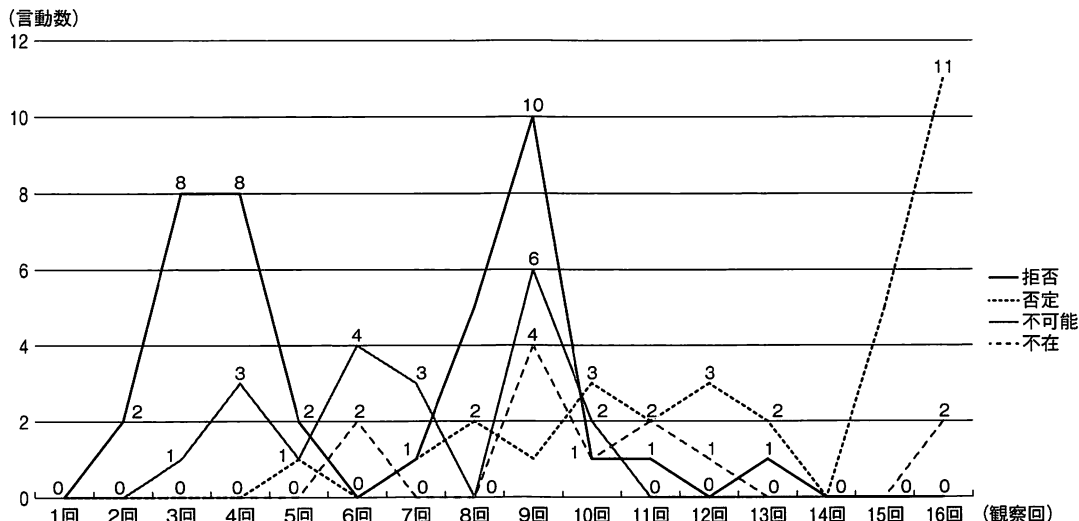


Figure1 各回における「拒否」「否定」「不可能」「不在」の言動の個数と推移

のずれ」を意味するものであったかを質的側面からも検討した。質的な分析を行うためのエピソードを以下の手順に沿って選択した。

手続き3で分類された「コミュニケーションのずれ」、すなわち「拒否」「否定」「不在」「不可能」を含むエピソードを抽出した。その際、一つのエピソードの単位を「対象児と母親が一つのモノを介して同じテーマでやりとりしている場面」とした。テーマが移行したり、媒介となるモノが変わったりした場合には、そのやりとりが終結したとみなした（終結の判断は筆者単独で行った）。そのエピソードが観察された回と月日を（ ）に示した。

「コミュニケーションのずれ」のエピソードは、「拒否」を含むものが29個、「否定」を含むものが17個、「不可能」を含むものが17個、「不在」を含むものが8個、合計71個であった（1つのエピソードに複数の「否定」などの言動が含まれるということもあって、エピソード数は5-1の結果の個数よりも少なくなっている）。

以下に、各時期に対応したエピソードを報告する。

第Ⅰ期 先述のように、第Ⅰ期には「拒否」の言動が10個、「不可能」の言動が1個、観察された。

第Ⅰ期の「拒否」の代表的なエピソードに＜エピソード①＞【Mが「S、好きなの」と言ってキュウリを見せるも、Sは「イラナイ」と言ってレンジを持ち上げる。それでも、Mは「キュウリ」と言ってSにキュウリを提示する。】（第3回7/22）があった。また、＜エピソード②＞【Sが「オチャノム」と言いながらトマトを手にする。Mが「S、お茶、どうぞ」とコップを差し出すと、Sはトマトを見て「トマト」「イラナイ」と言って、Mが指し出したコップを拒否する。】（第3回7/22）や、＜エピソード③＞【Mが「コップを取り出し、「はいどうぞ」とコップを机に出す。Sが「オチャ、ノム」と言うと、Mは「どうぞ」と言ってコップを差し出す。コップにお茶が入っていないと、Sは「オチャ」と要求する。Mが再び「じゃあ、お茶どうぞ」とコップを差し出すも、Sは、「イラナイ」「オチャ、ノム」と拒否をする。ようやくMは「ほんとに、飲みたいんだ、S」と言う。】（第3回7/22）があった。

第Ⅰ期の「不可能」のエピソードとしては＜エピソード④＞【Sがコップを傾け、コップの中のトマトを取り出そうとする。それを見たMが「取れた？」と尋ねると、Sはトマトに触れながら「トレナイ」という。】（第3回7/22）があった。

第Ⅱ期 第Ⅱ期には「拒否」の言動が27個、「否定」が8個、「不可能」が19個、「不在」が7個、観察

された。

第Ⅱ期の「拒否」の代表的なエピソードとして、＜エピソード⑤＞【Mが再度「お片付けしよう」「じゃあね」と箱を近づけると、Sは「イラナイ」と走り去り、洗面台へ行き、「モウイッカイ」と水を出そうとする。】（第5回8/20）があった。また、＜エピソード⑥＞【鍋を混ぜているSにMが「ここ、入れて」と皿を指さすとSは、「イラナイ」とミカンを鍋に入れる。Mが「食べたい、お母さん、欲しいな」「いただきますしたいな」と言うも、Sはミカンを鍋に入れる。Mが「よそってください」と皿を差し出すも、Sは鍋を混ぜながら「イラナイ」と言う。Mが「いらない？」「どうしようかな」と皿を下げると、Sは「ゴハン、タベル」と言う。それを聞き、Mも「ご飯食べよう」「よそって」と皿を指し出すも、Sは「イラナイ」と皿を手で押さえる】（第8回11/04）も見られた。

「否定」のエピソードとして、＜エピソード⑦＞【ブドウを切りながらSが「コーラ」「コーラ」「ホラ、コーラ」「コーラ」と言ってMを振り返って見る。Mが「チョッキン」と言うのに合わせて、Sはブドウを切る。Mが「どれがいいかな」と包丁を探し、「これの方がいいと思う」「ほら」と包丁をSに持たせようとするも、Sは「マチガエタ、コーラ」と言う。】（第8回11/04）があった。

「不可能」のエピソードには、＜エピソード⑧＞【Sが「チョンチョン」とウィンナーにケチャップをつけるふりをする、Mも「チョンチョン」とつけるふりをする。Sがウィンナーを口に入れると、MはSの手を取り、ウィンナーを口から離す。Sが「タベナイ（タベラレナイ）」と言うと、Mも「食べないよ（食べられない）」と言う。】（第6回9/10）があった。また、＜エピソード⑨＞【「アム」と言ってウィンナーを口に入れるSを見てMが「ウィンナー」と身振りで食べるふりをする。それを見てSは「タベナイ（タベラレナイ）」と言ってにやりと笑い、ウィンナーを机に置き、走り去る。】（第6回9/10）があった。ここでは、「タベナイ（タベラレナイ）」と言った後で「にやり」と笑う姿が観察された。さらに、＜エピソード⑩＞【Mが「皮、剥く」「S、やって」と柿を提示すると、SはMの包丁に触れる。Mが「見てて、いくよ」「せーの」と包丁で切るふりをしてみせる。Mが剥いている柿を見たSは「トレナイ」と言う。】（第9回11/24）や、＜エピソード⑪＞【Mがキャベツの葉を「ビリビリって」「ビリビリって」とめくるふりをする。それを見て、Sもキャベツの葉に触れ「コレ、トラナイデ（トレナイ）」と言う。Mが「取ら（れ）ない？」「これ」「お母さん、い

つもとるよ」と言う。Sは「トル」とキャベツをもって机に置く。】(第9回 11/24)も見られた。

「不在」のエピソードには、<エピソード⑫>【Mが「カンバイしよう」というと、SはMとカンバイする。その後、Sがコップの中を見て「モウナイ」「モウナイ」と言い、Mにコップを見せる。Mが「もうない?」「あるよ」という。Sが飲むふりをし、Mも「ゴクゴク」「あーおいしい」と飲むふりをする。その後で、Sが容器からコップに注ぎ、再び「モウナイ」と言う。】(第9回 11/24)があった。また、<エピソード⑬>【Mが「Sもご飯食べて」「のりたまご飯」と器を手に取り、「まぜまぜ」と言ってスプーンで混ぜ、「ハイどうぞ」とスプーンをSの口に近づける。Sがスプーンから食べるふりをする。Mも口を空けて食べるふりをし、「おいしい」と笑う。すると、Sが器の中を見て「モウナイ」と言う。それを聞いたMが「もうない」「ご馳走様?」「ご馳走様?」と器を机に置くと、Sは「モットタベル」という。それに応えて、Mも「もっと食べる」「はい、じゃあ、おかわり」「お代わり」「いくよ」という。】(第9回 11/24)があった。

第Ⅲ期 第Ⅲ期では、「拒否」が2個、「否定」が23個、「不在」が5個、見られた。

「拒否」のエピソードとして、<エピソード⑭>【海苔巻を切っているSにMが「S、お皿とって、お皿」と道具箱を指さすと、Sは道具箱を覗き見る。Mが再び「お皿」と言う。Sは「イラナイ」と拒否をする。】(第11回 12/17)があった。また、<エピソード⑮>【Mが「お子様ランチ、食べる?」と問うとSは「ヤダ」と言う。それでもMが「食べようよ」と誘うと、Sは「タベル」「イタダキマス」と言い、「アムアム、アーン」とお子様ランチをスプーンですくって食べる。】(第13回 01/28)があった。

「否定」のエピソードとして、<エピソード⑯>【Mが「お寿司、並べて、お寿司並べて」というと、Sは、「コレダ、コレダ」と皿の上のハンバーガーを取り出し、「マチガエテル」と言ってお寿司ではなく、ハンバーガーを作り直す。それを見たMが「じゃあ、やり直して」と言ってSがハンバーガーを作るのを見守る。】(第11回 12/17)があった。また、<エピソード⑰>【Mが「お子様ランチ」「S、じゃあ、お寿司」とお子様ランチを作ろうと提案し、「お寿司、並べて」「お寿司並べて」と言う。Sは、「コレダ、コレダ」と皿の上のハンバーガーを取り出し、「マチガエテル」とハンバーガーを作り直す。】(第11回 12/17)があった。さらに、<エピソード⑱>【Sがナゲットのソースを手

取り、「アケテ」と言う。Mは「はい、開けます」と応じる。Sが「チキンナゲット」と言う。Mは「はいよ」と手を差し出す。Sが「コッチ」とソースをMに渡すと、Mは「あ、チキンナゲット」とナゲットを手取る。その後、Sは、「コレ、マチガエテル、ナンカ」とナゲットを口に入れる。】(第15回 2/25)があった。さらに「否定」のエピソードでは、「ワスレチャッタ」が繰り返されるようになった。例えば、<エピソード⑲>【…Sは、「アレ、ワスレチャッタ(チガウの意味)」と言ってもう一つのポテトをMの前の皿(S用)に乗せる。Mが「S、それ、食べる?」と問う。Sは「ミテ、ピンク」「ワスレチャッタ」と言って、「Mのソースがピンクでない」と主張する。】(第16回 3/11)である。

「不在」のエピソードとして、<エピソード⑳>【Mが「食べて」「いただきます」「あむ」とハンバーガーを食べてみせる。Sは、「フォーク、ワスレチャッタ」と道具箱を探す。その隣で、Mは「わーおいしい」言う。】(第16回 1/28)があった。また、<エピソード㉑>【Mが「Sのもついで」と容器を取り出し、Sのコップを指差す。Sは、「モウナイ」とコップの中を見る。Mが「お母さん、ついだげる」とコップに注ぐふりをする。Sは、コップで飲み干し、笑顔を見せる。Mが「おいしい?」という。Sは再びコップに口をつけ、飲み干した後で「ミテ、モウナイ」とコップを指さす。】(第11回 12/17)があった。

6. 考察

本研究の目的は、(1)「初期のふり遊び」が展開する時期において「コミュニケーションのずれ」を示す言動も見られるのか、見られるとしたらどの程度見られるのか、またそれが時間的にどのように推移・展開するのかについて把握すること、(2)量的に把握された「否定」や「拒否」の言動が、本当に「コミュニケーションのずれ」(自分と他者の意図の違いを認識・理解していること)を反映しているものであるのかを確認することであった。以下、本研究で得られた知見について考察する。

6-1. 「コミュニケーションのずれ」の推移

「拒否」「否定」「不在」「不可能」の量的推移をみると、第Ⅰ期は「拒否」が10個、「不可能」が1個、観察された。後述する他の時期と比較すると、相対的に上記4つの言動は少なかった。辻(2024)によると、第Ⅰ期は「注意の共有」がなされることもなく、対象児が母親の行動を模倣していた時期である。そのなかでも「拒否」の言動が他の3つの言

動よりも相対的に多く観察された。これは、注意が共有されていなくても、対象児が「拒否」を通して自分の意図を母親に伝えようとしていたためと考えられる。言い換えると、この時期の「拒否」は、自他の違いを認識した上でなされた言動というよりも、「自分の思い」のみ主張していたものであったといえる。

この点について、5-2でエピソード分析を行ったところ、＜エピソード①＞【「MがS、好きなの」と言ってみせよう、Sは「イラナイ」と言ってみせよう。」（第3回7/22）があった。これは、キュウリを提示した母親に対して、対象児が母親の近くにあってキュウリを拒否する場面でのやりとりである。ここでは、注意の対象も共有されていない。このエピソードにみるように、第Ⅰ期では、「拒否」の発話が表出されたとしても、注意が共有されていなかったといえる。

第Ⅱ期では、「拒否」が27個、「否定」が8個、「不可能」が19個、「不在」が7個、観察された。この時期は上記4つの言動が他の時期と比較して相対的に多く見られた時期であった。辻(2024)によると、第Ⅱ期は三項関係が成立し、初期のふり遊びをするようになった時期である。「コミュニケーションのずれ」が対象への注意の共有を伴う場合に生じる(山本, 2011)ことを踏まえると、この時期に注意の共有がなされたからこそ、「コミュニケーションのずれ」を意味する上記4つの言動が増加したと思われる。

第Ⅰ期では「注意の共有」を前提としていなかった「拒否」の言動が大半であった。第Ⅱ期には「注意の共有」のもと、やりとりがなされるようになった。例えば、＜エピソード⑧＞や＜エピソード⑨＞、すなわち【ウィンナー「タベ(レ)ナイ」】、＜エピソード⑩＞【柿の皮、「トレナイ」】、＜エピソード⑪＞【キャベツの葉、「トレナイ」】は、「注意の共有」を行ったうえで「不可能」の言動を介してやりとりがなされている。同様に「不在」の言動を介したやりとり、例えば、＜エピソード⑫＞、＜エピソード⑬＞では、「モウナイ」を介して「ないこと」を共有するやりとりがなされている。

第Ⅱ期の「拒否」や「否定」のエピソードでは、「イラナイ」を介して自己を強く押し出す様子が示された。例えば、＜エピソード⑤＞【「お片付けしよう」-「イラナイ」】や＜エピソード⑥＞【お皿-「イラナイ」】、＜エピソード⑦＞【包丁-「マチガエテル」】では、対象児は母親が提示したのを見た後で、「イラナイ」と拒否をしたり「マチガエテル」と否定している。これらは、注意を共有したうえで、対象児が自分の意図を強く押し出しているものである。その意味では、この時期に、対象児の

自我が誕生し、自己主張するようになったと思われる。しかしながら、この時期には、互いの意図は調整されておらず、「コミュニケーションのずれ」としてやりとりがなされている。

第Ⅲ期は、「拒否」が2個、「否定」が23個、「不在」が5個、観察された。全体的には第Ⅱ期と比較して言動数が減少した。しかしながら、「否定」については増加した。否定機能を獲得することは、子どもが自分の意図と相手の意図とをある同一の水準に並置したうえで、相手の意図を否定することにより、自分の意図をより際立たせることができるようになったことを意味する(田中・田中, 1982)。それを踏まえると、「否定」が増加したこの時期より、対象児は自分の意図と母親の意図のずれを認識したうえで、「否定」することにより自分の意図を押し通そうとするようになったと考えられる。

そして、それは＜エピソード⑭＞【お寿司-「マチガエテル」】や＜エピソード⑮＞【お子様ランチ-「マチガエテル」】、＜エピソード⑯＞【ソース-「マチガエテル」】によっても確認される。辻(2024)では、第Ⅲ期を「表象的レベルでの交替遊び」、すなわち「する-される」という役割交替を基盤に初期のふり遊びが相互に行き交い展開するようになった時期としている。対象児が母親の意図を理解しつつ、自分の意図を押し出していることを踏まえると、対象児はこの時期より、自分を主体として自覚し、自分なりの目的と、そこに至る手順を内面に定め、それを持続するようになったと思われる。その意味では、対象児は第Ⅱ期に他者理解の発達を、第Ⅲ期に自己理解の発達を遂げ、「初期のふり遊び」を介して母親とやりとりするようになったと考えられる。

6-2. 補足的論考

本研究の検討目的である「コミュニケーションのずれ」とは違う観点ではあるが、重要であると思われるやりとりについて、補足的に報告・分析を行う。

- (1) 「コミュニケーションのずれ」を調整すること
＜エピソード⑦＞の「マチガエテル」にみるように、対象児は第Ⅱ期から「否定」を用いて自分の意図を強く押し出すようになった。これは、対象児が自分の意図が母親に伝わっていないことを察するようになったこと、自分の意図と母親の意図を対比し「マチガエタ(チガウ)」ということばを用いて自分の意図を伝えようとするようになったことを示唆している。特に、第Ⅲ期になると、＜エピソード⑱＞【「…Sは、「アレ、ワスレチャッタ(チガウの意味)」と言ってみよう一つのポテトをMの前の皿(S用)に乗せる。Mが「S、それ、食べる?」と問うも、Sは「ミテ、ピンク」「ワスレチャッタ」と言って、「Mのソー

スがピンクでない」と主張する。】(第16回3/11)というやりとりがなされるようになった。この場合、対象児は「ワスレチャッタ」ということばを繰り返すことによって意図のずれを調整しようとしていたとみることができる。

量的分析において、「否定」が増えたことは明らかであったが、対象児が「ワスレチャッタ」を繰り返していたことをとらえることはできなかった。質的検討によって、対象児は、自分の意図と母親の意図のずれを理解したうえで、ことばを言い換えたり、繰り返すことによって、母親との間で意図を調整しようとしていたことが示された。

(2)イメージを共有すること

「不在」を介したやりとりの質的な変化について考えてみたい。〈エピソード⑩〉にみるように「モウナイールヨ」のやりとりが第Ⅱ期に展開するようになった。これは、「ないモノをあるモノ」として母親とやりとりするようになったことを示唆している。その後、第Ⅲ期になると「ないこと」を共有し、楽しむ姿が観察された。例えば、〈エピソード⑪〉【…Mが「お母さん、ついだげる」とコップに注ぐふりをする、Sは、コップで飲み干し、笑顔を見せる。Mが「おいしい？」という、Sは再びコップに口をつけ、飲み干した後で「ミテ、モウナイ」とコップを指さす。】(第11回12/17)である。これは、対象児と母親が「ナイーケドーアル」を共有するだけでなく、空のコップを飲み干した後で対象児が笑顔を見せたことを特徴としている。そして、これは母親に対する社会的参照行為を含むエピソードである。ふり遊びが三項関係や表象のみならず、社会的参照行為とも関連して発達すること(Lillard, Pinkham, & Smith, 2010)を踏まえると、対象児が母親に笑顔を見せたことは、「ないモノをあるモノ」として認識しただけではなく、「ふり」を「ふり」として母親と共有するようになったことを示唆している。Beyer, & Gammeltoft(1998/2008, p.33)は「18か月以降になると、子どもは目の前にある世界(具体的なイメージ)とは異なった世界(解釈したイメージ)を想像することができるようになり、新しい可能性に向けて想像力を自由に働かせるようになる」と指摘した。第Ⅱ期に表象を発生させ、「ナイーケドーアル」を共有するようになった対象児は、第Ⅲ期に社会的参照行為を介して真の意味での「初期のふり遊び」をするようになったといえる。

(3)自閉スペクトラム症のユニークさ

本研究において、対象児が母親との間で「コミュニケーションのずれ」を調整する過程が示された。

その一方で、自閉スペクトラム症におけるユニークさ(特異性)も示された。例えば、〈エピソード⑫〉【Mが「これ、Sの」「Sくん、お待ちせしました」とS用の皿をSの前に置くも、Sは、「アレ、ワスレチャッタ」と箱を手取る。MはSの皿においた箱を提示し、「チキンは、これだよ」「入ってる、ほら、ほら」と開けて見せる。Sは箱を見て、二つの皿を見比べる。それを見たMが「じゃ、一緒に食べよう」と声をかけるが、Sは、「ワスレチャッタ」と皿のキュウリを手に取り、それをMに差し出し、「キュウリ、ワスレチャッタ」という。Mは、「キュウリ」と受け取り、「キュウリ、ありがとう、じゃあここに」とハンバーガーにはさむ。Sは不本意そうな顔でMがキュウリをはさむ様子を見る。】(第16回3/11)や〈エピソード⑬〉【Sが「ネエ、ミドリ、ワスレチャッタ」という。しかし、Mは、「Sは、チキンナゲット開けるよ」と箱を開け、「チョンチョンして食べる？」と言う。それでも、Sが「ワスレチャッタ」というと、Mが「なに、忘れたの？」と聞く。すると、Sは、「コッチハネ、オカアサンノ」と皿を入れ替えようとする。ここでようやく、Mが「これ、お母さんの」と応じ、Sが「ピンク」とMのソースがピンクであることを伝える。意図が共有できると、Mの「いただきますをしよう」に応じて、Sも「イタダキ」と応じる。】(第16回3/11)である。これらをみると、対象児は言い方を変えたり、繰り返し言い続けることによって、自分の思い描いたようにソースが準備されていないことを訴え続けていた。母親にとって、容器の色がピンクであっても緑であっても、どちらも「ソース」である。しかし、対象児にとっては「ミドリ-自分」「ピンク-母親」と固定されており、「どちらも同じ」を受け入れることが難しかったように思われる。別府(2016)が、障害のない子どもは発達段階の一つである「1歳半の節」において、「～デハナイ…ダ」という操作様式を獲得することにより、時空間的なつながりと自己と他者の意図のつながり、調整が同時に可能となるとしたが、自閉スペクトラム症児は、自己と他者の意図のつながり、調整に弱さを抱えているため、時空間的なつながりと自己と他者の意図のつながり、調整が連関して発達することが難しいと指摘した。これは、自閉スペクトラム症児においては、意図のつながりや調整よりも時空間的なつながりが強まることにより、他者の意図を受け入れることが難しくなることを示唆している。自閉スペクトラム症児にみられるこうしたユニークさは、対象児でいえば、「ミドリ-自分」「ピンク-母親」というつながりであったと思われる。その意味では、自閉スペクトラム症児においては、自我が誕生し、自分と他者の意図の違いを認識し理解したとしても、

時空間的なつながりに関心が高いこともあって、柔軟にふり遊びを展開することが難しくなると思われる。

7. おわりに

本研究の結果をまとめると、以下の4つの知見が得られた。(1) 自閉スペクトラム症児の「初期のふり遊び」が展開する時期において、「拒否」「否定」「不可能」「不在」といった「コミュニケーションのずれ」を示唆する言動が見られる、(2)「注意の共有」が生じていない時期においては「コミュニケーションのずれ」を示唆する言動も相対的に少ない、(3)「拒否」の言動は「注意の共有」を前提としない機能から「注意の共有」をした上で「拒否」するという機能へと展開しうる、(4)「自他の意図の違い」を認識した段階において「否定」の言動が増えうる、というものである。

こうした知見は、ふり遊びが難しいとされる自閉スペクトラム症児も「コミュニケーションのずれ」を介してふり遊びをするようになることを、また、ふり遊びの成立過程における「ずれ」の重要性を示唆している。その意味では、本研究においてこれらの点を示すことができたことは、理論的な意義があったといえる。さらに、実践的には、ふり遊びといえは「意味を共有する」方向で考えられがちだが、「ずれ」も重要な意味を持ちうることが示された。この点は実践的な意義であったといえる。

次に、本研究の課題について、研究面と理論面の2点から提起する。

研究面においては、エピソードを十分に検討できていないことが挙げられる。本研究では、探索的に「拒否」「否定」「不可能」「不在」を「コミュニケーションのずれ」を示す言動として捉え、それを補強する形でエピソード分析を行った。それゆえに、すべてのエピソードについて報告を行えている訳ではなく、筆者の恣意的なサンプリングの可能性は否定できない。より多様な着目点を理論的に整理した上で、改めて、すべてのエピソードを時系列的に配置し、それ独自の論考を行うことで、本研究で見逃していた重要なやりとりを拾うことができる可能性がある。

理論面においては、対象児の自己主張する姿や二語文を話したりする姿について詳細に分析することはできていないことが挙げられる。発達を理解する基本概念として「可逆操作の高次化における階層一段階理論」(田中、1980)を提唱した田中(1999)は、1歳後半を「大文字のI次元形成」と位置付けた。そして、この時期には、ことばが爆発的に増加すること、ことばの言い換えをしたり、二語文が出

現したりすること、対比的なことばを使用するようになること、自我が拡大し、自己主張をもとにしたやりとりをするようになることを示した。田中のいう「大文字のI次元形成」にあたる1歳後半といえは、ふり遊びが出現する時期である。その意味では、初期のふり遊びをするようになる過程では「コミュニケーションのずれ」のみならず、ことばが増え、自我も拡大するといえる。これに関連して、自閉スペクトラム症児と母親とのシャボン玉遊び場面におけるやりとりを分析した辻・別府(2023)は、「交替的やりとり」をするようになる過程において自己主張や拒否が見られるようになる」と指摘した。これは、「交替的やりとり」と自己主張や拒否が連関して成立することを示唆している。その意味では、交替を伴う「初期のふり遊び」も「コミュニケーションのずれ」のみならず、自己主張と連関して成立すると思われる。しかしながら、本研究においては、「初期のふり遊び」と「コミュニケーションのずれ」、「自己主張」、「二語文」、もっといえば自我の育ちとの関連をとらえることはできなかった。その意味では、今回着目した「コミュニケーションのずれ」を、言動といった現象面だけではなく、「自我の育ち」といったより大きな概念群とも関連付けて理論化していくことが今後の課題である。

謝辞

本研究は、「人間発達研究所研究科(2021-23年)」の修士論文を再分析したものである。研究科の先生方、荒木穂積先生、木下孝司先生にご指導をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、自閉スペクトラム症のふり遊びに関する視座を示してくださった別府哲先生と、海外の初期のふり遊びの情報を提供してくださいました山本ミッシェルのぞみ先生に感謝いたします。査読者の方々より貴重なご意見をいただきましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。最後に、本研究に快く協力してくれたS君とお母様に心より感謝申し上げます。

文献

- 麻生武(1996). ファンタジーと現実. 金子書房.
- 麻生武(1997). 乳幼児期の“ふり”の発達と心の理解. 心理学評論, 40(1), 41-56.
- 荒木穂積(2023). 療育プログラム開発20年の歩み:「あひるくらぶ」の実践から. 竹内謙彰・荒木美知子・松本佑・荒木穂積(著). インクルーシブ社会研究, 22. 療育プログラム開発の20年, 63-86. 立命館大学人間科学研究所.
- 荒木穂積・井上洋平・立田幸代子・前田明日香・森光彩(2004). 高機能自閉症・アスペルガー障害児の発達と教育的対応:ふり遊びの分析か

- ら. 障害者問題研究, 32 (2), 131-138.
- Baron-Cohen, S., Allen, J., Gillberg, C. (1992). Can autism be detected at 18 months? The needle, the haystack, and the CHAT. *British Journal of Psychiatry*, 161, 839-843.
- Beyer, J., & Gammeltoft, L. (1998). *Autism & Play*. Jessica Kingsley Published Ltd. 井上洋平・荒木穂積 (訳) (2008). 自閉症と遊び. クリエイツかもがわ.
- 別府哲 (2016). 自閉スペクトラム症と1歳半の節. 障害者問題研究, 44 (2), 98-105.
- Charman, T., Swettenham, J., Baron-Cohen, S., Cox, A., Baird, G., & Drew, A. (1997). Infants with autism: An investigation of empathy, pretend play, joint attention, and imitation. *Developmental Psychology*, 33 (5), 781-789.
- 藤野友紀 (2014). 発達を学ぶ・発達に学ぶ: 誕生から6歳までの道すじをたどる. 全障研出版部.
- Lillard, A., Pinkham, M. A., & Smith, E. (2010). Pretend Play and Cognitive Development. Goswami, U. (Ed). *The Wiley-Blackwell Handbook of Childhood Cognitive Development*, second edition. 285-311. Blackwell Publishing Ltd.
- 井上洋平 (2005). 自閉症児に対するふり遊び研究の成果と課題. 立命館人間科学研究, (8), 29-40.
- 近藤直子 (2011). 1歳児のころ: 大人との関係の中で育つ自我. ひとなる書房.
- 小川真人・高橋登 (2012). 幼児の役割遊び・ふり遊びと「心の理解」. 発達心理学研究, 23(1), 85-94.
- 嶋津峯真 (1985). 新版 K 式発達検査法: 発達検査の考え方と使い方. ナカニシヤ出版.
- 田中昌人 (1980). 人間発達の科学. 青木書店.
- 田中昌人・田中杉恵 (1982). 子どもの発達と診断 2: 乳児期後半. 大月書店.
- 田中昌人 (1999). 1歳児の発達診断入門. 大月書店.
- Thompson, N. B., & Goldstein, R. T. (2019). Disentangling pretend play measurement: Defining the essential elements and developmental progression of pretense. *Developmental Review*, 52, 24-41.
- Tomasello, M. (1999). The Cultural Origins of Human Cognition. 大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓 (訳) (2006). 心とことばの起源を探る. 勁草書房.
- 辻あゆみ・別府哲 (2020). 自閉スペクトラム症幼児におけるふり遊びの発達と支援. 岐阜大学教育学部紀要, 人文科学, 68 (2), 111-120.
- 辻あゆみ・別府哲 (2023). 自閉スペクトラム症児における交替的やりとりの発達. 心理科学, 44 (2), 103-122.
- 辻あゆみ (2024). 自閉スペクトラム症児における初期のふり遊びの発達過程: 親子間の応答関係に着目して. 人間発達研究所紀要, 37, 1-10.
- 山本登志哉 (2011). ディスコミュニケーション分析の意味; 拡張された媒介構造 (EMS) の視点から. 山本登志哉・高木光太郎 (編). ディスコミュニケーションの心理学: ずれを生きる私たち. 215-245. 東京大学主版会.

要 旨

辻（2024）は、自閉スペクトラム症児が「初期のふり遊び」をするようになる過程を応答関係との関連から検討した。その結果、「初期のふり遊び」の成立過程では、意味の共有のみならず「コミュニケーションのずれ」も観察された。本研究では、「拒否」や「否定」等の言動に着目し、「初期のふり遊び」と「コミュニケーションのずれ」との関連を明らかにすることを目指した。その結果、以下の4つの知見が得られた。第一に「初期のふり遊び」が展開する時期に「拒否」「否定」等「コミュニケーションのずれ」を示唆する言動が見られること、第二に「注意の共有」が生じていない時期には「コミュニケーションのずれ」を示唆する言動も少ないこと、第三に「拒否」の言動が「注意の共有」を基盤としたものへと変化しうること、第四に「自他の意図の違い」を認識した段階で「否定」の言動が増えることが示された。ふり遊びが難しいとされる自閉スペクトラム症児も「コミュニケーションのずれ」を介して意図の違いを調整し、ふり遊びをするようになると考えられた。

キーワード 自閉スペクトラム症 初期のふり遊び コミュニケーションのずれ 拒否 否定

Abstract

Development of “communication gap” between an autism spectrum disorder toddler and his mother in the “pretend play” in early childhood: Focusing on “refusal” and “denial” behaviors.

TSUJI Ayumi*

*Adjunct Professor at Wako University

Tsui (2024) examined the process through which a child with autism spectrum disorder begins engaging in “early pretend play.” In the process of the development of “early pretend play,” not only was the sharing of meaning observed, but also the “communication gap.” This study focused on behaviors such as “rejection” and “denial,” aiming to clarify the relationship between “early pretend play” and “communication gap.” The following four findings were obtained: First, behaviors suggesting a “communication gap,” such as “rejection,” “denial,” “impossibility,” and “absence,” were observed during the period when “early pretend play” develops. Second, fewer behaviors suggesting “communication gap” were seen during periods when “attention sharing” had not yet occurred. Third, behaviors of “rejection” could transform into those based on “attention sharing.” Fourth, it was shown that when children recognize “differences in intentions” between themselves and others, behaviors of “denial” increase. Even children with autism spectrum disorder, who are considered to struggle with pretend play, were found to adjust differences in intention through a “communication gap” and eventually engage in pretend play.

keywords: autism spectrum disorders, pretend play, communication gap, refusal and denial behavior